第59回石川県高等学校新聞コンクール「総合の部」「部門の部」で

金大附高新聞230号「優秀賞」「論説賞」受賞

本校新聞編集局が編集・発行した『金大附高新聞』（第230号　平成22年1月20日発行）がこの程、石川県高等学校新聞コンクールで「総合の部」で「優秀賞」、「部門の部」で「論説賞」を獲得しました。「総合の部」では昨年度の紙面よりさらに特集記事を充実させ、内容も向上している点が高く評価されました。「部門の部」では、社会的話題を自らの問題として論じた点が論説文として優れていたとの評価でした。論説賞を獲得した新聞編集局長澤本君の「局説」をここに転載いたします。

局説

最近、世間を騒がせた事件の一つに結婚詐欺容疑で捕まった女性の周りで4人の男性が不審死していたというものがあった。詐欺による事件といえばこの事件の他にもオレオレ詐欺やフィッシング詐欺なども耳に新しい。このような犯罪は人の弱みや優しさにつけこんで行われるのがほとんどである。ゆえにこのような犯罪の増加はまさに「正直者は馬鹿を見る」という風潮を強めることにつながるだろう。

現に、おそらくこのような世相を背景としているのであろうが、自分のまわりすべてを疑っていると豪語する人も出てきている。どこにでも「詐欺」が起こりうる現在、そのような視点でものを考えるのは大切かもしれない。しかし、行き過ぎた疑いもまた大きな問題である。足利事件を覚えているだろうか。行き過ぎた疑いをかけられなければ、菅家さんが19年間も不当に拘束されることはおそらくなかっただろう。また、行き過ぎた疑いでなくとも疑った目で自分の周りに接していたら、いつか本物の好意を踏みにじってしまったり、身の回りの人間関係に支障をきたしたりしてしまうだろう。最近の風潮の下では、優しさは踏みにじられ、不用意な疑いのみが増えることを避けることはできないのだろうか。

皆さんは最近、司法制度が大きく変化したのを覚えているだろうか。そう、今話題の裁判員制度である。この制度は裁判官だけでなく無作為に選ばれた一般市民も実際の量刑を決めるといったものである。その過程はおもに証拠に根拠があるかを吟味し、それをもとに自分の主張を述べて、それに対する他の人の意見を聞いて自分の結論を出すというものだ。我々もこのやり方を見習うべきではないだろうか。たとえば、自分が「怪しい」と疑った時、なぜ疑っているのかをほかの人に話してみるのである。一度客観的な視点から見てもらうと、自分が結構思い込んでしまっていたということに気づくことはよくある。また、話す過程で自分が疑うべき点を見落としていることに気づくこともあるかもしれない。

他の人に話すにはまずその人を信じなければならない。そしてこのような風潮の時代にこそ、「話すことのできる相手を持つべきである。疑う時には確かな根拠に基づき、そして何より一人で抱えこまないことが「正直者が福を得る」風潮へとつながるのである。（澤本）